

## 初期中英語の宗教作品に見る愛の受難曲

和田 葉子

13世紀初頭、英語によって創作された作品がまだ少なかった時代に、初期中英語で書かれた優れた指導書が生み出されていた。それは、古英語の伝統を継承しながらも、新しい時代の息吹を感じさせる豊富な語彙を用って著された *Ancrene Wisse* Group (『隠遁修道女の手引き』作品群)<sup>1)</sup> と称されている複数の作品である。この作品群は、*Ancrene Wisse* (『隠遁修道女の手引き』)、Katherine Group (キャサリン作品群) そして、Wooing Group (求愛作品群) からなっている。現在、*Ancrene Wisse* Group とまとめて呼ばれている理由は、各作品が書かれた時代、地域、言語や文体、テーマなどにおいて共通点が多く、いくつかは、複数の同じ写本に見つけられるからである。このグループの中心となる *Ancrene Wisse* は、世俗の楽しい生活を捨てて、独居房で隠遁修道女としての新たに宗教生活を始めようとする、うら若き良家の3人の姉妹のために書かれたと考えられている。このグループに属する他の作品も、世俗の者たちにわかりやすくキリストの教えを説く内容になっている。そのような目的をもって創作されたため、中世において、教会の正式な言語であったラテン語や、当時、なお、権威があるとみなされていたフランス語ではなく、最初の読者の母語であった英語で書かれたのである<sup>2)</sup>。

上述の 'Wooing Group' (求愛作品群) は、*Pe Oreisun of Seinte Marie* (『聖

1) Bella Millett, "The *Ancrene Wisse* Group", *A Companion to Middle English Prose* edited by A. S. G. Edwards (Cambridge : D. S. Brewer, 2004), pp. 1-17.

2) しかし、*Ancrene Wisse* においては、フランス語を母語とする読者、あるいはバイリンガルの者も交じていたことを示す箇所がいくつか見られる (Yoko Wada, '*Temptations*' from *Ancrene Wisse* (Suita, Osaka and Cambridge : Kansai University and D.S. Brewer, 1994), p. xxxiii). ちなみに *Ancrene Wisse* にはフランス語とラテン語によるテキストが存在するが、これらは英語からの翻訳であると考えられている (Wada, '*Temptations*', pp. xxiv-v and lviii-lxiv).

母マリアへの祈り』)、*On Lofsong of ure Louerde* (『主への愛の歌』)、*On Wel Swuðe God Ureisun of God Almihti* (『全能の神への祈り』)、*Pe Wohunge of ure Lauerd* (『主の求愛』) の4作品からなる。いずれも頭韻を踏んだ散文による黙想であり、抒情的でドラマティックな表現が大きな特徴となっている。『聖母マリアへの祈り』はブリタニーのレンヌの司教 Marbod (1035-1123) がラテン語で書いた *Oratio ad Sanctam Mariam* (『聖母マリアへの祈り』) を自由に翻訳した作品であることが知られているが、その他の作品については、特定のラテン語の原典はないと考えられている。『主への愛の歌』はキリストと聖母マリアへの祈り、『全能の神への祈り』と『主の求愛』はキリストを恋人とすることがいかに望ましいかを説き、原罪を償うために自ら十字架にかかり苦しむキリストの姿を黙想する作品である。これらの作品は聞き手の感情に直接、訴えかけ、神への愛情を喚起する作品となっている<sup>3)</sup>。ちなみに、これらは13世紀初期の、Richard Rolle 以前の英語による唯一の叙情的宗教散文だといわれている<sup>4)</sup>。

*Ancrene Wisse* Group 全体の作品の中でも、一際目を引くのが Wooing Group を代表する *Pe Wohunge of ure Lauerd* である。なぜなら、イエスを黙想する宗教作品でありながら、世俗的とも思えるほど激しく恋愛の感情を吐露しているからである。14世紀以降は、先に述べた Richard Rolle の他、Julian of Norwich, Margery Kempe などによって、英語で書かれた神秘主義的作品が多く生み出さ

3) Sara Lipton, 'Sweet Lean of his Herd: Writing about Looking at the Crucifix,' *Speculum* 80 (2005), pp. 1172-1208. エディションとしては W. Meredith Thompson, *Pe Wohunge of Ure Lauerd edited from British Museum MS. Cotton Titus D. xviii, Together with On Ureisun of Ure Louerde, On Wel Swuðe God Ureisun of God Almihti, On Lofsong of Ure Louerde, On Lofsong of Ure Lefdi, Pe Oreisun of Seinte Marie from the Manuscripts in Which They Occur*, EETS o.s. 241 (Oxford: Oxford University Press, 1958) がある。Wooing Group の作品を収録しているのは次の4写本である。British Library, MS Cotton Nero A. xiv (*On Wel Swuðe God Ureisun of God Almihti, Pe Oreisun of Seinte Marie, On Lofsong of ure Louerde* を含む); British Library, MS Cotton Titus D. xviii (*Pe Wohunge of ure Lauerd* を含む); British Library, MS Royal 17 A. xxvii (*Pe Oreisun of Seinte Marie* を含む); London, Lambeth Palace, MS. 487 (*On Wel Swuðe God Ureisun of God Almihti* を含む)。

4) Thompson, *Pe Wohunge*, pp. xvi.

れ、神への個人的な強い想いや体験を表現したが、13世紀初期に一人称を使って、イエスに向かって恋愛感情をこれほど熱く「歌った」英語による散文は数少ない。Wooring Group の作品を “the little mystical rhapsodies” と呼ぶ研究者もいるほどである<sup>5)</sup>。

この論文では、*De Wohunge of ure Lauerd* をとりあげて、どのようにして、キリストの受難 ‘Passion’ の場面が、激情 ‘passion’ をかきたてるに至ったのかを考察してみたい。

*De Wohunge* は、658行からなる頭韻を踏んだ叙情的散文である。黙想者は最初から、イエスを憧れの恋人として呼びかけ、その熱い想いを語る。

Iesu swete iesu. mi druð. mi derling. mi drihtin. mi healend mi huniter. mi haliwei. Swetter is munegunge of þe þen mildeu o muðe. Hwa ne mei luue þi luueli leor? Hwat herte is swa hard þ ne mei to melte iþe munegunge of þe? Ah hwa ne mej luue þe luueliche iesu? for inwið þe ane arn alle þe þinges igedered þ eauer muhen maken ani mon luuewurði to oðer.<sup>6)</sup>

(Jesus sweet, Jesus my dear, my darling, my Lord, my Savior, my honey-drop, my balm; sweeter is the memory of you than honey in the mouth. Who cannot love your lovely face? What heart is so hard hat it cannot melt in the memory of you? Ah, who cannot love you, lovely Jesus? For within you alone are all things gathered that can ever make anyone worthy of another's love.)<sup>7)</sup>

蜂蜜を使った比喩は、聖書に頻繁に現われる。例えば、“(The judgments of the Lord are) sweeter also than honey and the honeycomb.” (Ps. 19: 10), “How

5) Thompson, *De Wohunge*, p. xxi.

6) Thompson, *De Wohunge*, p. 20.

7) Anne Savage and Nicholas Watson (transl.), *Ancrene Wisse and Associated Works* (Mahwah, NJ: Paulist Press, 1991), pp. 247-8.

sweet are thy words unto my taste! yea, sweeter than honey to my mouth!" (Ps. 119:103), "For the lips of a strange woman drop as an honeycomb, and her mouth is smother than oil." (Prov. 5:3), "Pleasant words are as an honeycomb, sweet to the soul and health to the bones." (Prov. 16:24)<sup>8)</sup>などが挙げられる。さらに、この抒情的な作品と、神学者、聖アンセルム（1033-1109）の『祈りと黙想』には、人間の五感に訴えるように、蜂蜜という言葉を使っているという共通点が見られる。次に2つの例を挙げておく。

How sweet is your word in the jaws of my soul, above honey and honeycomb in the mouth. Eaten, it grows in sweetness, and when that sweetest sap is sucked it flows more and more within. ("Prayer to St Stephen")<sup>9)</sup>

Taste the goodness of your Redeemer, be on fire with love for your Saviour. Chew the honeycomb of his words, suck their flavor which is sweeter than sap, swallow their wholesome sweetness. Chew by thinking, suck by understanding, swallow by loving and rejoicing. Be glad to chew, be thankful to suck, rejoice to swallow. ("Meditation on Human Redemption")<sup>10)</sup>

聖アンセルムはイタリア生まれのベネディクト会士で、ノルマンディーのル・ベックで修道院長を務めた後、カンタベリー大主教となった。アンセルムの祈りと

---

8) 聖書からの英語による引用はすべて King James Version による。

9) Benedicta Ward (transl.), *The Prayers and Meditations of St Anselm with the Proslagion* (London: Penguin Books, 1973), p. 180. "Prayer to St Stephen" は William 征服王 (1027-1087) の娘の一人である Adelaide に送られたといわれている (R.W. Southern, *Saint Anselm and his Biographer: a Study of Monastic Life and Thought 1059-c.1130* (Cambridge: Cambridge University Press, 1966), p. 36)。ちなみに聖バルナールも "Jesus is honey in the mouth, melody in the ear, a cry of joy in the heart" と書いている (Southern, *Saint Anselm*, p. 47)。

10) Ward, *The Prayers*, p. 230.

黙想の作品は、その叙情的散文を、ただ一人、誰もいない場所で声に出して朗読することによって、黙想する者の感情を高め、神への敬愛や感謝の気持ちを感動的に経験させるという効果を持っている<sup>11)</sup>。

アンセルムは従来のカロリング朝の時代に見られた地味で厳格な性格を持つ祈りを、感情と知性あふれるものにした。そして彼のそうした作品は、やがて生まれてくる *Dies irae* や *Imitatio Christi* などの中世の優れた宗教文学の先駆けとなったのである<sup>12)</sup>。情感に満ちた Wooing Group の作品の作者（たち）もアンセルムの黙想と祈りのスタイルに大きく影響を受けたと考えられる。また、同じく12世紀に活躍したドイツのザクセンで生まれた神学者、サン・ヴィクトルのヒューゴ（1078頃-1141）の *De anima* や、ヨークシャーのシトー派の修道院で著された *Dulcis Iesu memoria*、そしてフランスの神学者クレルヴォーのベルナルド（1090-1153）の書いた“Sermons on the Song of Songs”とも共通点があることが指摘されている<sup>13)</sup>。

キリストへの祈りは397年、カルタゴ教会会議において、典礼で行うことが禁止されたが、民間で、キリスト教賛歌の父と呼ばれた聖アンブロシウス（340-397）やグレゴリウス1世（540-604）によって続けられ、11世紀になって、特に受難のキリストに対して個人が行う祈りとして、大きく花開いた<sup>14)</sup>。聖アンセルムの書いた黙想と祈りは、非常に私的、個人的なものでありながら神学的であり、そのジャンルの発展に大きく貢献したといえる。それ以降、受難のキリストと黙想者の心理的距離は急激に縮まった。また、イングランド北部出身のシトー会士、リーヴォーのアイルレッド（1110-67）は、彼の著した『隠遁者のための生活の

11) Ward, *The Prayers*, p. 51.

12) *Dies Irae* はイタリア生まれで聖フランシスコの伝記を著したフランシスコ会の托鉢修士チェラノのトマス Thomas of Celano (1200頃-1260~70頃) によって13世紀の半ばに書かれた作品だと言われている。*De Imitatione Christi* は1418年頃、ドイツ人で聖アウグスチノ修道会のトマス・ア・ケンピス (1380頃-1471) の作品であると考えられている。

13) Thompson, *Pe Wohunge*, p. xix and Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 246.

14) Ward, *The Prayers*, p. 39.

戒律』の中で、読者にキリストの生と死の出来事を、まるでその現場に立ち会っているかのように、ドラマティックに思い描くように朗読することを勧めている<sup>15)</sup>。アイルレッドと同時代の、ラヴェンナに生まれたベネディクト派修道士で枢機卿となったペトルス・ダミアニ（1007頃-1072）もその祈りの中で、キリスト受難の様子を実際に見て聞いているかのように描いている<sup>16)</sup>。

*De Wohunge*においても、キリストが磔になる過程が時間の経過に従って、次々と臨場感をもって描かれているので、黙想者は、キリストのすぐそばで歴史的な一大事件に立ち会っているような錯覚に陥る。初期中英語期までは、宗教作品は教会の権威あるラテン語で著わすのが当然であった。また、聖職者にとってラテン語はヨーロッパにおける共通語でもあった。しかし、やがて、宗教作品の読者層に変化が起こる。13世紀になり、托鉢修道士たちがヨーロッパ大陸からイギリスに活動拠点を広げ始める。ドミニコ修道会は1221年、フランシスコ修道会は1224年、修道士たちをイギリスに送った。*Ancrene Wisse*の制作年代が1224年以後であろうと推測する理由は、その最も古い写本のひとつに、これら2つの托鉢修道会が言及されているためである<sup>17)</sup>。元来、ラテン語で書かれた黙想と祈りは、11世紀に発展し12世紀に確立した後、托鉢修道会の活動とともに、世俗の人々が理解できるよう、彼らの国語で創作されるようになった。しかし、過去の偉大な宗教者たちの思想と作風は受け継がれていたのであった。そして、その先駆けともいえるものが、この *De Wohunge* だったと考えられる。

生々しい受難の描写は、キリストを黙想者が今にも触れられそうなほどの距離に近づけ、やがて中世後期になると、神秘主義において、隠遁修道女や敬虔な信者はキリストの花嫁になると、頻繁に言われるようになる。これは、クレルヴォ

---

15) Part three 'The Threefold Meditation' of *Rule of Life for a Recluse (Treatises, The Pastoral Prayer, The Works of Aelred of Rievaulx vol.1* (Spencer, MA : Cistercian Publications, 1971), pp. 79-102).

16) Ward, *The Prayers*, p. 39.

17) Wada, 'Temptations', p. lxxv.

一のベルナルの著した“Sermons on the Song of Songs”の強い影響によるものだと考えられている<sup>18)</sup>。彼は、シトー会の修道士で、フランスのクレルヴォーの初代の大修道院長であった。聖書の「雅歌」には男女の恋愛感情が美しく、そして妖艶に表現されている。興味深いことに、ベルナルは修道士たちに、「雅歌」は「私たちの経験についての本」である、と語っている<sup>19)</sup>。

*De Wohunge* にも、キリストの花嫁という概念を抽象的なイメージとして表現するのではなく、俗世の恋愛のように、キリストに恋い焦がれ、彼を自分のものになりたいと思う激しい愛情が表わされている。非常に人間的な感情に満ちている。次の引用箇所では、キリストの受難を目の当たりにしている（かのような）黙想者は、キリストに体を開いてその中のラブレターを読ませてほしいと呼びかけ懇願する<sup>20)</sup>。

A swete iesu þu oppnes me þin herte for to cnawe witerliche & in to reddenn trewe luue letters. for þer I mai openlich seo hu muchel þu me luuedes. Wið wrange schuldi þe min heorte wearnen siðen þ tu bohtes herte for herte.<sup>21)</sup>

(Ah! Sweet Jesus, you open your heart to me, so that I may know it inwardly, and read inside it true love-letters; for there I may see openly how much you loved me. Wrong would it be to refuse you my heart, since you have bought heart with heart.)<sup>22)</sup>

磔の場面が終わると黙想者は、人間に代わって原罪を負い、受難によって人類

18) Cf. Kilian Walsh (transl.), *On the Song of Songs I*, The Works of Bernard of Clairvaux vol.2 (Spencer, MA: Cistercian Publications, 1971), pp. xxi-xxv.

19) Sermon 3: 1. Walsh, *On the Song of Songs I*, p. 16.

20) *Ancrene Wisse* part VII には、王として女性に求愛するキリストが、愛を受け入れてくれない女性に、まず使者を通じて封印した手紙（『旧約聖書』）を渡すが、よい返事を得られなかったため、王が自ら彼女のもとを訪れ、開いた手紙に自分の血で愛の言葉を記した、とある。

21) Thompson, *De Wohunge*, p. 35.

22) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 255.

を救ってくれたイエスに対して、自分のような浅ましい人間を彼の恋人、花嫁にしてくれたことに感激する。

Iesu swete iesu þu tu faht for me azaines mine sawle fan. þu me derennedes wið like. & makedes of me wrecche þi leofmon & spuse.<sup>23)</sup>

(Jesus, sweet Jesus, in this way you fought for me against the enemies of my soul. You vindicated me with your body, and made of me, a wretch, your lover and spouse.)<sup>24)</sup>

そして、語り手は、イエスが花嫁となった自分を寝室に連れて行き、鍵のかかった部屋に閉じ込める様子を黙想し、霊的な愛の歓びにひたる。

Broht tu haues me fra þe world to bur of þi burðe. steked me i chaumbre. I mai þer þe swa sweteli kissen & cluppen. & of þi luue haue gastli likinge. A swete iesu mi liues luue wið þi blod þu haues me boht. & fram þe world þu haues me broht.<sup>25)</sup>

(You have brought me from the world to the bower of your birth, locked me in a chamber. There I may sweetly kiss and hold you, and in your love take pleasure, spiritually. Ah, sweet Jesus, my life's love, without your blood you have bought me, and from the world you have brought me.)<sup>26)</sup>

花嫁は自分と結婚し、俗世から救ってくれたイエスへのお返しとして、4つの壁に囲まれた2人きりの部屋の中で、イエスとともに死ぬまで磔になることを覚悟

---

23) Thompson, *De Wohunge*, p. 35.

24) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 256.

25) Thompson, *De Wohunge*, p. 35.

26) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 256.



する。

Hwat mai þole for þe for al þ tu þoledes for me? Ah me bihoueð þ tu beo eað to paie. a wrecche bodi & a wac bere ich ouer eorðe. & tat swuch as hit is haue ȝiuen & ȝiue wile to þi seruise. Mi bodi henge wið þi bodi neiled o rode. sperred querfaste wið inne fowr wahes & henge i wile wið þe & neauer mare of mi rode cume til þ i deie. For þenne schal I lepen fra rode in to reste. fra wa to wele & to eche blisse A. iesu swa swet hit is wið þe to henge. forhwen þ iseo o þe þ henges me biside. Þe muchele swetnesse of þe. reaues me fele of pine. Bote swete iesu hwat mai mi bodi aȝaines tin. For ȝif ich mihte a þusand fald ȝiue þe me seluen nere hit nowt onont te þ ȝef þe seluen for me.<sup>27)</sup>

(What can I suffer for you for all that you have suffered for me? … A wretched body and a weak one I bear over earth — and that, such as it is, I have given and will give to your service. My body will hang with your body, nailed on the cross, fastened, transfixed within four walls. And I will hang with you and nevermore come from my cross until I die — for then shall I leap from the cross into rest, from grief into joy and eternal happiness. Ah, Jesus, so sweet it is to hang with you. For when I look on you who hang beside me, your great sweetness snatches me strongly from pain. But sweet Jesus, how can my body be set against yours? For if I could give you myself a thousandfold, it would be nothing compared with you, who gave yourself for me.)<sup>28)</sup>

ここには、命をかけて自分を救済したイエスに、初夜、貞節を誓う世俗的なイメージが用いられている。しかし、実際には、4つの壁で囲まれたこの寝室は、

27) Thompson, *Þe Wohunge*, p. 36.

28) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 256.

隠遁修道女の独居房でもある。聖アンセルムは彼の祈りと黙想を、日常の雑務からしばし離れ、ただ一人で部屋の中にもり神を想うように指示している。

“Put aside your weighty cares, let your burdensome distractions wait, free yourself awhile for God, and rest awhile in him. Enter the inner chamber of your soul, shut out everything except God and that which can help you in seeking him, and when you have shut the door, seek him. Now, my whole heart, say to God, ‘I see your face, Lord, it is your face I seek.’”<sup>29)</sup>

*De Wohunge* には、さらに、宮廷風恋愛のイメージも盛り込まれている。恋する語り手は、最初からイエスのもつ、あらゆる美徳について一つ一つ長々と褒め称える。それは俗世の男性について言われているのと同じ具体的な事柄となっている。

Feirnesse & lufsum neb. flesch hwit under schrud makes moni mon beo luued te raðer. & te mare. Summe gold & Gersum & ahte of þis werlde makes luued & heried. Sume fredom & largesce þ leuer is menskli to giuen þen cwedli to wið halde. Summe. wit & wisdom & zapschipe of werlde. Summe maht & strengðe to beo kid & kene ifiht his riht for to halde. Summe noblesce. & hehnesse of burðe. Summe þeaw & hendeleic & lastelese lates. Summe menske & mildeschipe & debonairte of herte & dede. And zette ouer al þis kinde makes sibbe frend euchan to luuen oðer.<sup>30)</sup>

(Beauty, a lovely face, a body white under clothing, make many men beloved all the sooner and all the more; some are beloved and praised for gold and riches and worldly possessions; some for liberality and largesse-those who

---

29) *Proslogion*, ch. 1 (Ward, *The Prayers*, p. 52).

30) Thompson, *De Wohunge*, pp. 20-21.

prefer giving generously to singly keeping back; some for wit and wisdom and worldly cleverness; some for power, and the strength to be renowned and keen in battle to fight for his cause; some for nobility and highness of birth; some for virtue and graciousness and perfect manners; some for honor and gentleness and mildness in heart and deed; and sill more than all of this, nature makes those friends who are kin love another.)<sup>31)</sup>

そして黙想者は次のように、イエスへの賛美をまとめている。

Denne þu wið þi fairnesse. þu wið richesce. þu wið largesce. þu wið wit & wisdom. þu wið maht & strengðe. þu wið noblesce & hendeleic. þu wið meknesse & mildeschipe & mikel debonairte. þu wið sibnesse. þu wið alle þe þinges þ man mai luue wið bugge haes mi luue chepet.<sup>32)</sup>

(So you with your beauty, you with riches, you with generosity, you with wit and wisdom, you with power and strength, you with nobility and courtesy, you with meekness and mildness and great gentleness, you with kinship, you with all the things one can buy love with have bought my love.)<sup>33)</sup>

このようにキリストは、世俗における完璧で理想的な男性として描かれている。そこに「容姿」と「富」が含まれているのがいかにも俗っぽく思えるが、1180年ごろ書かれたとされる、アンドレアス・カペルラーヌスの著した『宮廷風恋愛について』の第6章「愛はいかにして獲得しうるか」には、次のような記述がある。

---

31) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 248.

32) Thompson, *De Wohunge*, p. 27.

33) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 251.

「ある人の教えでは愛の獲得には5つの方法があると言う。すなわち、外見の美しさ、気高い心、弁舌の冴え、豊かな財力と気前の良さである。愛は最初の3つの方法でのみ獲得されるべきで、他の2つは愛の法廷からは除外すべきだと思うが、そのことはしかるべきところで指摘しよう。」<sup>34)</sup>

こうしたフランスの宮廷風恋愛は、当時の上流階級の読者にも、騎士物語などを通じて、なじみがあったと考えられる。

騎士道を貫き、愛する人のためには命も投げ出す王として描かれたキリストは *Ancrene Wisse* にも現れる。その第7章では、*Pe Wohunge* とは逆に、キリストの方が、世俗の男性のように、隠遁修道女を次のように口説く。

Nam Ich þinge feherest? Nam Ich kinge richest? Nam Ich hest icunnet? Nam Ich weolie wisest? Nam Ich monne hendest? Nam Ich þinge freoest? …Nam Ich alre þinge swotest ant swetest?<sup>35)</sup>

(Am I not the most courteous of men? Am I not the richest king? Am I not the highest born? Am I not the wisest among the rich? Am I not the most courteous of men? Am I not the most generous one? … Am I not of all things the gentlest and sweetest?)<sup>36)</sup>

そして、「あなたに欲しいだけのお金と、たくさんの城、王国、世界の統治権を与えよう、あなたを天国で女王とし、永遠の喜びを与えよう」、と熱弁をふるう。このように、*Ancrene Wisse* では、キリストが自らのセールスポイントを次々と

---

34) アンドレアス・カベルラーヌス (瀬谷幸男訳) 『宮廷風恋愛について——ヨーロッパ中世の恋愛指南書』(東京:南雲堂, 1993年), p. 16.

35) Bella Millett, (ed.), *Ancrene Wisse: a Corrected Edition of the Text in Cambridge, Corpus Christi College, MS 402, with Variants from Other Manuscripts* 2 vols, EETS OS 325 and 326 (Oxford: Oxford University Press, 2005-6), I, p. 149.

36) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 194.

説明し、女性に求婚する。これについて、作者は、それほど素晴らしい人に愛されながら、彼の愛に応えないとすれば、何とひどいことか、とキリストの求愛を受け入れようとしない頑固な女性を非難する。

最初に述べたように<sup>37)</sup>、*Ancrene Wisse* は、元来、若い3人の良家の隠遁修道女のための指導書として執筆された。したがって、宗教書とはいえ、日常の身近な例をあげ、具体的で、世俗の生活から隠遁生活に入ったばかりの人々にも、理解できるように分かり易く書かれている。騎士物語という設定を用い、その中でキリストをヒーローに見立て、ハンサムでしかもあらゆる美德を備えた者として描写する手法は、この間まで俗世に暮らしていた若い女性向けだといえる<sup>38)</sup>。*De Wohunge* の黙想者は、*Ancrene Wisse* で言及されている美点の一つ一つについて称賛し、キリストに恋焦がれる。そして、黙想者は、*Ancrene Wisse* でのイエスの求愛を、*De Wohunge* において、喜んで受け入れ、花嫁になるのである。*Ancrene Wisse* の続編といえるであろう。*Ancrene Wisse* で述べられているキリストへの愛の教えを理解した上で、*De Wohunge* の黙想が行われるよう目論まれていた、あるいは *De Wohunge* を読んだ者はすぐに *Ancrene Wisse* の愛についての章を思い出すであろうという前提で書かれたのではなかろうか。

*De Wohunge* は、*Ancrene Wisse* を非常に意識して書かれた作品であると思われる。*Ancrene Wisse* は次のような言葉で締めくくられている。

---

37) p. 69.

38) Woolf は、英語による作品において、キリストが騎士として婦人に求愛する、という譬え話を使ったのは、*Ancrene Wisse* が最初であったであろうと述べている (Rosemary Woolf, *The English Religious Lyric in the Middle Ages* (Oxford: Oxford University Press, 1968 p. 59)。*Ancrene Wisse* part 7における王の女性への求愛の譬えについては、Catherine Innes-Parker, "The Lady and the King: *Ancrene Wisse's* Parable of the Royal Wooing Re-Examined", *English Studies* 75 (1994), pp. 509-22; Elizabeth Robertson, *Early English Devotional Prose and the Feminine Audience* (Knoxville, TN: University of Tennessee Press, 1990); Dennis Rygiel, "Structure and Style in Part 7 of *Ancrene Wisse*", *Neuphilologische Mitteilungen* 81 (1980), pp. 47-56; Rosemary Woolf, "The Theme of Christ the Lover-Knight in Medieval English Literature", *The Review of English Studies* 49 (1962), pp. 1-16.

Of þis boc redeð hwen ze beoð eise euche dei leasse oðr mare. Ich hopie þet hit schal beon ow, zef ze hit redeð ofte, swiðe biheue, þurh Godes muchele grace; ells Ich hefde uuele bitohe mi muchele hwile. Me were leouere, Godd hit wite, do me toward Rome þen forte biginnen hit eft forte donne. Ʒef ze findeð þet ze doð alswa as ze redeð, þonckið Godd Ʒeorne. Ʒef ze ne doð nawt, biddeð Godes are, ant beoð umben þer-onuuen þet ze hit bet halden efter ower mihte.<sup>39)</sup>

(Read from this book in your leisure time every day, much or little. I hope that it will be very profitable to you, if you read it often, through God's great grace-or else I have badly wasted my long hours. God knows, I would rather set out for Rome than start it over again! If you find that you do just what you read, thank God sincerely; if you do not, pray for God's mercy, and be busy from then on in keeping it better, according to your strength.)<sup>40)</sup>

そして、*De Wohunge*の作者も読者に呼びかけながら、次のように終わっている。

Prei for me mi leue suster. þis haue i writen þe for þi þ wordes ofte quemen þe heorte to þenken on ure lauerd And for þi hwen þu art on eise carpe toward iesu & seie þise wordes. & þenc as tah he heng biside þe blodi up o rode. And he þurh his grace opne þin heorte to his luue & to reowðe of his pine.<sup>41)</sup>

(Pray for me, my dear sister. I have written you this because words often allure the heart to think on our Lord. And so, when you are at ease, talk to Jesus and say these words. And imagine that he hangs beside you, bloody, on the cross. And may he, through his grace, open your heart to his love, and to pity for his pain.)<sup>42)</sup>

---

39) Millett, *Ancrene Wisse*, p. 164.

40) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 207.

41) Thompson, *De Wohunge*, pp. 37-8.

42) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 257.

ちなみに、1995年、Margaret Laing と Angus McIntosh は、13世紀初期に筆写された、London, British Library, MS Cotton Titus D xviii に収められている *Ancrene Wisse*, *Katherine group* (*Seinte Katheirne* (聖キャサリン), *Seinte Margarete* (聖マーガレット), *Seinte Iuliene* (聖ジュリアナ), *Hali Meidhad* (聖なる処女性), *Sawles Warde* (魂の守り)), *Ʒe Wohunge of ure Lauerd* の言語について、これらの作品が同一の方言で書かれていないことを明らかにした。この写本には、唯一現存する *Ʒe Wohunge of ure Lauerd* が収められているが、この作品が最初に書かれた時の方言は、その他の作品群の方言とはおそらく異なっていたであろうという。

“Though all five texts are in one hand, the language they display is not homogeneous. All but one of them (W) [*Ʒe Wohunge of ure Lauerd*], which is unique to Titus, exist in other versions which are either in ‘AB language’ or something fairly close to it, and in T these texts still manifest numerous linguistic features from their sources. The language of W likewise suggests an underlying AB-like ingredient though this probably does not go back to the original version of it.”<sup>43)</sup>

Laing and McIntosh は、さらに、*Ʒe Wohunge* が初めに書かれたであろう地域を特定した。それは、中西部でもかなり北東部にあたり、*Ancrene Wisse* が成立したといわれている Herefordshire からはかなり離れている<sup>44)</sup>。Titus 写本は一人の写字生によって筆写され、その作品群は内容も *Ancrene Wisse* と関係が深いとはいえ、*Ʒe Wohunge* は他の作品より成立が少し遅かったかもしれない。

43) Margaret Laing and Angus McIntosh, “The Language of *Ancrene Riwe*, the *Katherine Group* Texts and *Ʒe Wohunge of Ure Lauerd* in BL Cotton Titus D XVIII”, *Neuphilologische Mitteilungen* 96 (1995), pp. 235-63 at p. 235.

44) Laing and McIntosh, “The Language”, p. 259.

*Ancrene Wisse* を知っていた者が、ある種、その続編ともいえる作品を黙想という形にして、書き下ろしたのが *De Wohunge* であったという可能性については先に述べた。

この Titus 写本に収録されている *Ancrene Wisse* は、男性の読者向けに書き換えられている<sup>45)</sup>。修正は完全ではないが、13世紀初期という原作が書かれて、おそらく間もない時期に、このような男性ヴァージョンが存在した事実は、*Ancrene Wisse* が早くから広く、様々な人々に読まれていたことを示している。*De Wohunge* は、*Ancrene Wisse* が読者層を広げ、進化しつつある時期に書かれたのではないか。*De Wohunge* は一つの写本にしか現存しないが、こちらも、かなりの人気があったと思われる。というのは、14世紀の終わり頃、明らかに *De Wohunge* を元に書かれたと考えられる *A Talking of the Love of God* という作品が生まれているからである<sup>46)</sup>。ドラマティックな効果をもち、非常に感情に訴えかける *De Wohunge* は *Ancrene Wisse* とともに神への愛をわかり易く説く作品として広く親しまれたと考えられる。

*De Wohunge* の以外の *Wooing Group* の作品の中にも、同様に、キリストへの熱情が、世俗の男性に対するもののように、具体的に表現されているものがある。例えば、イエスを恋人のように抱きしめたい、と願う場面が *Lofsong of ure Louerde* に見つけられる。ここには、聖書の「雅歌」第2章第6節の引用がうまく織り込まれている<sup>47)</sup>。

---

45) Wada, 'Temptations', p.liv.

46) Salvina M. Westra (ed.), *A Talking of the Love of God* (The Hague : Martinus Nijhoff, 1950); Margery Morgan, "A Talkyng of *Pe Loue of God* and the Continuity of Stylistic Tradition in Middle English Prose Meditations," *Review of English Studies* (1952), pp. 97-116; Lois K. Smedick, "Cursus in Middle English: *A Talking of the Love of God* Reconsidered," *Mediaeval Studies* 37 (1975), pp. 387-406.

47) "He brought me to the banqueting house, and his banner over me was love. Stay me with flagons, comfort me with apples; for I am sick of love. His left had is under my head, and his right hand doth embrace me" (「雅歌」2章4-6節)。



let me beo þi leouemon & siggen ase heo seið. leof wið þi luft erm. þ is. wið þi ne worldliche zeouen hold up min heawed ðet ich þuruh to mche wone ne falle i fulðe of sunne. & leof wið þin rig term. þ is in heuene wið endelease blissen biclupe me abuten. al schal beon þ ich wulle þe-onne forð swete milde louerd bidde oðer wilni<sup>48)</sup>

(Let me be your beloved, and say as she says, “Dear, with your left arm” — that is, with your earthly gifts — “hold up my head, so that I do not fall into the filth of sin through too much need; and dear, with your right arm” — that is, in heaven with endless joys — “hold me tight.” From then on, sweet, gentle lover, all will be as I want to ask or desire.)<sup>49)</sup>

また、*On Wel Swuðe God Ureisun of God Almihti*においても、黙想者は、キリストの恋人あるいは花嫁にしてもらいたいと、イエスに恋い焦がれ、片思いをしている女性のようなのである。

zif mi bur brithnesse. & brihtte mine soule þet is suti. & make hire wurðe to þine swete wuninge. Ontend me wið blasé. of þine leitinde luue. Let me beon þi leofmon. & ler me for to louien þe liuiinde louerd. woa is me þet ich am so freomede wið þe. auh ase þu al heauest licamliche iwend me from þe worlde. wend me ec heortliche. & turn me allunge to þe. wið soðe luue. & mid bi leaue. þet ich nabbe no mong ne felauhschipe. ne speche. ne priuite wið þe worlde. for ich wot mi leofmon. der ich so cleopien þe. ðet fleschlich luue & gostlich. eorðlich luue & heouenlich ne muhen onone wise bedden in one breoste. . . . A swete iesu. hwi mid ermes of luue ne cluppe ich þe so feste.

48) Thompson, *De Wohunge*, p. 13.

49) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 327.

bet no þing þe onne ne muwe breiden mine heorte? hwi ne cusse ich þe sweteliche ine goste. wið swete munegunge of þine goddeden? hwi nis me bitter. al þ mi flesch likeð. hwi nis me unwurð euerich wordlich þing azein þe muchele de lit of þine swetnesse? hwi ne iuele ich þe imine breoste so swete ase þu ert? hwi ertu me so freomede? hwi ne con ich wowen þe. wið swete luue wordes alre þinge sweetest. & alre þinge leofluket & luue wurðest?<sup>50)</sup>

(Give my chamber brightness, and brighten my soul, which is dirty, and make her worthy to be your sweet dwelling. Your fiery love. Let me be your lover, and teach me to love you, loving Lord. Woe is me that I am so estranged from you! But as you have turned me wholly away from the world in my body, turn me also in my heart, and turn me altogether to you with true love and with faith, so that I have no companionship, no fellowship, no speech, no closeness with the world. For I know, my lover — do I dare call you so? — that fleshy love and spiritual, earthly love and heavenly, can in no way lie together in one heart. . . . Ah, sweet Jesus! Why do I not embrace you with arms of love so fast that nothing can then draw my heart away? Why do I not kiss you sweetly in my spirit with the sweet memory of your good deeds? Why is all that pleases my flesh not bitter to me? Why is not every world thing worthless to me in comparison with the great delight of your sweetness? Why do I not feel you in my breast, so sweet as you are? Why are you so estranged from me? Why can I not woo you with sweet love-words, sweetest of all things, and of all things most dear and most worthy of love?)<sup>51)</sup>

これらは、神秘体験の中で、神との愛の合体を成し遂げようとする、イギリス

---

50) Thompson, *De Wohunge*, pp. 5 and 7.

51) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, pp. 322-3.

における神秘主義の先駆けというべきものなのだろうか<sup>52)</sup>。Ancrene Wisse Groupの核であるAncrene Wisseは実際のところ、神秘的色彩がほとんど見られない作品といってもよいであろう。幻視とは程遠い、非常に实际的な神への愛を説いた作品である。しかし、神秘主義的と解釈できる箇所が一つある。それはミサを記述した部分である。Ancrene Wisseの最初の読者である隠遁修道女になったばかりの娘たちは、教会に接した小さな部屋で、外との接触をできるだけ断ち切り、小さく簡素な独居房の中で、禁欲生活を送らねばならなかった。そこには、普段は閉めておかねばならない小さな窓が一つあったが、ミサの時には開けることが許され、そこから教会の中を覗き、ミサに参加することができた<sup>53)</sup>。Ancrene Wisseには、こう書かれている。

Efter þe measse cos, hwen þe preost sacredð — þer forzeotedð al þe world, þer beoð al ut of bodi, þer I sperclinde luue bicluppedð ower leofmon, þe into ower breostes bur is iliht of heouene, ant haldeð him heteueste aþet he habbe izgettet ow al þet ze eauer easkið.<sup>54)</sup>

(After the kiss of peace when the priest consecrates the host, forget all the world, be wholly out of your body, embrace in shining love your lover who has alighted into the bower of your heart from heaven, and hold him as tight as you can until he has granted all you ever ask.)<sup>55)</sup>

この箇所について、これは、あくまで比喩的な表現であり、実際にトランス状

52) "May I be worthy to be incorporated into your body 'which is the church', so that I may remain in you and you in me". (Anselm, 'Prayer Before Receiving the Body and Blood of Christ') (Ward, *The Prayers*, p. 101).

53) Robert Hasenfratz, *Ancrene Wisse* (Kalamazoo, MI: Western Michigan University, 2000), p. 11には、テキストの描写から考え得る隠遁修道女の独居房の位置関係が図で示されている。

54) Millett, *Ancrene Wisse*, p. 13.

55) Savage and Watson, *Ancrene Wisse*, p. 59.

態になることではない、と解釈されることが多い。作品が書かれた13世紀に、聖体拝領によって信仰心を高めることが盛んになるとともに、聖体の秘跡の儀式は、霊的な経験としてミサに出席している信者たちすべての目と心に訴えかけるようドラマティックに行われるようになった<sup>56)</sup>。それを *Ancrene Wisse* で説明しているにすぎないというのだ。しかし、この箇所は、作品全体を通して、決して神秘主義的だとはいえない *Ancrene Wisse* において、やや奇異な感じがする。ミサという、神と一体化する神秘的な機会に、神を黙想し、恋人のように神を情熱的に愛し身近に感じるよう、積極的に勧めていると思われる。神秘主義的体験は誰にでも、できるというものではない。うら若き隠遁修道女たちが実際に、神秘主義的体験をしたか否かは別にして、*Ancrene Wisse* と *Wooing Group* の作者(たち)は、神秘主義的方法を使って、彼女らと近寄りが見たい神との距離を縮め、神を何ものよりも強く愛するように教えているのであろう。

聖アンセルムはキリストの死と受難を重要視し、イエスの受難によってのみ、人間は救われると説明した。エロイズとの恋愛で有名なピーター・アベラール(1079-1142)は、神の救いが有効となるのは神が人間への愛を示したときであり、神は、それと引き換えに人間の愛情を勝ち得るとした。それゆえ、キリストは受難という方法を選んだのだと考えた。それを反映して、キリストの図像にも時代とともに明らかな変化が見られるという。かつては英雄のようにまっすぐに強い姿で十字架にかかっていたキリスト像であったが、いまや、キリストは死んだ状態で、はりつけになっており、その肉体の5つの傷口からは血がほとばしり出て、体は曲がっている。そんなイエスは、観るものの心を打ち、悲しみを誘うようになった。それほどの犠牲を払ったイエスを人間は愛さざるを得なくなるのだ。13世紀、イタリアの神学者、トマス・アキナス(1225-74)は、受難以外の方法では人間は救済されなかったとするアンセルムの考え方に反対していたにもかかわらず、そんなアキナスも、受難という方法によって神は人類への愛を示すことが

---

56) Miri Rubin, *Corpus Christi : the Eucharist in late medieval culture* (Cambridge : Cambridge University Press, 1991), p. 54.

できたとした。アキナスは毎日、私的なミサをあげていたという。黙想も行っていたことであろう<sup>57)</sup>。

Rosemary Woolfは、非常に叙情的な黙想の作品がイギリスで生まれた原因を、人間の自然な感情を重視したクレルヴォーのベルナルドゥスの思想だけでなく、13世紀の英語の質に大きく関係していたと考える。Woolfによると、自然な感情を表現するには日常の言葉が一番びったりしているので、当時の「英語の低い地位」(“lowly status of English”)が最適であったという。“English was obviously at this time very limited as a medium for writing: subjects which required nobility or complexity of expression were ordinarily beyond its range.”しかし、運の良いことに、とWoolfは続ける。ラテン語のように権威をもって神学を論じることもできず、フランス語のようにすばらしい恋人達の恋愛を格調高く詠むこともできない英語であったからこそ、人間的な自然な愛の表現をするにふさわしかったと述べる<sup>58)</sup>。ちなみに、ピーター・ドロンケも、その著書『中世ヨーロッパの歌』において、英語で著された作品の中には、ラテン語で書かれたものよりも表現が優れているものがあることを認めながらも、「残存する「中英語」(1200年以降)の恋愛詩を見ると、まず気付くことは言葉と形式が洗練されていないということであろう。しかし、それは悪い意味においてはではない。飾り気がなく、簡潔である。」と言う<sup>59)</sup>。

しかし、*Ancrene Wisse Group*の作品が書かれた初期中英語の時代は、フランス語からの語彙がたくさん借用され、古英語の語彙もまだ残されていたという時期で、今にも去ってゆく語と新たに入ってきた語が入り混じる、語彙においては、百花繚乱まさに春たけなわ、という時代であった。粗野な英語だからこそ、人間的な感情に満ちた黙想の文学が生み出させた、とは考えにくいのではないか。

13世紀になって、ヨーロッパ大陸から入ってきた、人間の自然な感情を重要視

57) Woolf, *The English Religious Lyric in the Middle Ages*, pp. 21-2.

58) Woolf, *The English Religious Lyric in the Middle Ages*, p. 9.

59) ピーター・ドロンケ (高田康成訳)『中世ヨーロッパの歌』(東京:水声社, 2004年), p. 313.

するあたたかな風が、イギリスに吹き込んだ時、英語は市民権を獲得する土台を築きつつあり、英語による独自の文学が生み出され始めていた。英語による宗教学は世俗の人々の心にも訴えかけ、彼らも、まるで修道士や修道女のように、キリスト教を熱心に信仰することが流行するようになった。11～12世紀にラテン語で書かれ洗練されていった、イエスへの熱い想いを語った祈りや黙想の手法はそのまま引き継がれ、英語で創作されるようになって、生々しく再現されたキリストの受難の場面は、人々の心に届き、焼き付けられることになった。

イギリスでは、14世紀になって、ようやく Richard Rolle, Julian of Norwich, Margery Kempe などによって、多くの神秘主義的作品が生み出された。しかし、それ以前に、宗教生活をわかりやすく説いた *Ancrene Wisse* や、*De Wohunge of ure Lauerd* を始め、多くの関連する作品のような、情熱的な黙想の抒情散文が、宗教家たちの努力によって英語で書かれ、広く庶民の信者にも読まれるようになり、英語による本格的な神秘主義文学を受け入れる下地を作っていたのである<sup>60)</sup>。

---

60) 本論文は2008年5月10日関西大学東西学術研究所において開催された国際シンポジウム「国境なきヨーロッパ——文学における異文化接触の形」および、2008年5月24日広島大学で行われた日本英文学会第80回全国大会でのシンポジウム「ヨーロッパの神秘主義——霊性とナラティブ」での2つの発表原稿をもとに加筆、修正したものである。なお、本論文では引用できなかったが、*Ancrene Wisse* の現代英語訳として最も優れている Bella Millett, *Ancrene Wisse, Guide for anchoresses: a translation* (Exeter: University of Exeter Press, 2009) が刊行されたことを付け加えておきたい。